

ダイアナ・W・ジョーンズ『ハウルの動く城』における ウェールズ表象と階級意識

菱田 信彦*

Welshness and Class Identity in Diana W. Jones' *Howl's Moving Castle*

Nobuhiko HISHIDA

要 旨

ダイアナ・W・ジョーンズのファンタジー小説『ハウルの動く城』において、主人公の魔法使いハウルは現実世界のウェールズから来たという設定になっている。これは、魔法世界での彼の描写のためというよりも、彼とウェールズに住む親族との関係を描くための設定であると思われる。ハウルは姉のミーガン、そしてその夫であるガレスと折り合いが悪いが、それは彼らがウェールズ人でありながらイギリス中産階級的なライフスタイルを志向しているのに対し、ハウルが、ラグビーを愛好するなど、ウェールズ人としてのアイデンティティに誇りを持っているためらしい。また、彼が姉を自分の進学のため「犠牲」にしたことに負い目を感じていることを思わせる記述もある。魔法世界でのハウルの戦いは、姉や義兄に対する葛藤を克服しようとする彼の苦闘として解釈できる。自分の城に転がりこんできたソフィーを助けることは、ハウルにとってある意味でミーガンへの償いなのではないか。またガレスとの関係の変化は、やはりウェールズ出身とされる魔法使いサリマンを救おうとするハウルの努力を通して描かれている。この作品において、ハウルがウェールズ出身だという設定は、彼が抱える問題を表象するために巧みに用いられている。それは階級や地域が生み出す文化やライフスタイルの違いが個人の間で軋轢へと結晶していく過程を浮かび上がらせ、それに向き合わねばならない人々の苦悩を描き出している。

キーワード：ダイアナ・W・ジョーンズ、『ハウルの動く城』、ウェールズ性、階級、文化表象

*教授 英文学

はじめに

ダイアナ・W・ジョーンズによるファンタジー小説『ハウルの動く城』(*Howl's Moving Castle*, 1986)の主人公、ハウルは、魔法の国インガリーの魔法使いだが、現実世界のウェールズから来たという設定になっている。拙論「ダイアナ・W・ジョーンズ『ハウルの動く城』にみる他者としての家族」において、私は、ハウルが故郷のウェールズに住む家族との間に問題を抱えており、その問題が、魔法世界においては、インガリーの「王室付魔法使い」サリマンとの関わりを通して描かれていると論じた。サリマンはハウルと同じくウェールズ出身で、ウェールズではベンジャミン・サリヴァンと呼ばれている。しかしこの論文では、ハウルが抱えている家族の問題とは何なのか、ということをはっきりさせるには至らなかった。その点について考察するのが本論の目的である。

まず考えなければならないのは、そもそもなぜウェールズなのか、ということである。ハウルが帯びているウェールズ性はかなり念の入ったものだ。彼の故国での名はハウエル・ジェンキンス (Howell Jenkins) だが、このハウエルは10世紀にいわゆる「ハウエルの法 (Cyfraith Hywel)」を制定したウェールズ王の名に由来している (Williams 124)。ジェンキンスも、英語でいえば“little John”に相当する、南ウェールズなどに多い姓である。さらにハウルは魔法世界でペンドラゴン (Pendragon) を名乗るが、これはもちろんアーサー王の父、ユーサー・ペンドラゴンに由来するもので、ブリトン人の支配者であることを表す称号だ。ハウルは魔法世界においても、自分がペンドラゴンゆかりのウェールズ人であることを誇るがごとく、この名を看板に掲げているのである。

なぜハウルはこれほど徹底して「ウェールズ人」として描かれるのだろうか。その一方で、彼が魔法世界で披露するさまざまな魔術には、アーサー王伝説や『マビノギオン』など、ウェールズ伝承の反映を思わせるものは見あたらない。彼が背負っているウェールズ的な要素は、もっぱら彼と故郷の家族との問題を浮かび上がらせるために設定されているように思われる。

その問題の一端が初めて明らかになるのは作品の第11章である。ここでハウルはソフィーやマイケルとともにウェールズを訪れる。そこにはハウルの姉のミーガン (Megan)、姪のマリ (Mari)、そして甥のニール (Neil) がいて、道路沿いに建つ小ぎれいな家の一軒に住んでいる。ハウルとミーガンの間はあまりうまくいっていないようで、彼女は久しぶりに訪れたハウルに次のような非難の言葉をあびせる。

You're a disgrace to me and Gareth, lounging about in those clothes instead of buying a proper suit and looking respectable for once, taking up with riffraff and layabouts, bringing them to this house! Are you trying to bring me down to your level? You had all that education, and you don't even get a decent job, you just hang around, wasting all that time at college, wasting all those sacrifices other people made, wasting your money. . . (151-2) (下線は引用者による)

ここで気になるのは、下線部でミーガンが「他の人々が払った犠牲」について述べていることだ。「他の人々」とはむろん自分のことだろう。そして、その直前にハウルの大学生活が言及されていることから考えても、その「犠牲」はどうやらハウルの進学と関係があるらしい。ミーガンはハウルを大学へ行かせるために何らかの犠牲を払ったのだろうか。そうとすれば、それは何だったのだろうか。

またミーガンは、長く滞在できないと告げるハウルに対して、“Gareth isn't in yet,” (148) と意味ありげに言っている。このガレス (Gareth) は、作品にはほとんど登場しないが、ミーガンの夫である。ハウルと姉の仲がギクシャクしているのは、この義理の兄とも何らかの関わりがあるようだ。ガレスが唯一登場するのは、第15章で、ウェールズに向けて開いているハウルの寝室の窓を通して、ソフィーが彼らの庭をのぞき見る場面である。ここでは彼は次のように描写されている。

The sun was low across the neat garden. A large, dark man was out there, enthusiastically throwing a red ball towards Howl's nephew, Neil, who was standing with a look of patient suffering, holding a bat. Sophie could see the man was Neil's father. (208)

クリケットにはふつう赤いボールが使われるので (Pervez 65)、ここで彼らがやっているのはクリケットだと思われる。手入れの行きとどいた自宅の芝生の上で、気の進まない息子にクリケットをやらせようと熱心にボールを投げているガレスの姿は、われわれに奇妙な違和感を残す。

その一方、ウェールズにおけるハウルはしばしばラグビーと結びつけて描かれる。ウェールズを訪れた際、ハウルは自分たちの服装を現代的なものに変えるが、そのときハウルが着ている服には“WELSH RUGBY”と書かれている (146)。また第14章では、魔女の呪いが成就するのは夏至のころだろうという見通しを示した後、彼は、夏至の前日にラグビー・クラブ

の同窓会があるから、それにはぜひ行きたいと述べる（199）。そして第20章で夏至の朝ラグビー・クラブの同窓会から帰ってきたハウルは、すっかり酔っ払っており、ソフィーに向かって“Didn't know I used to fly up the wing for my university, did you, Mrs Nose?”（265）と管を巻く。ハウルが大学時代ラグビー・クラブに属しており、家族とほとんど顔を合わせなくなった今でさえクラブの同窓生とのつきあいは絶っていないこと、ラグビーが彼のウェールズへの帰属意識と密接な関わりをもっていることがうかがえる。

「ウェールズ性」ということを考える場合、このラグビーは重要な要因となる。マーティン・ジョーンズは、ラグビーとウェールズの“national identity”との関わりについて次のように論じている。

The growth of anti-Englishness in Welsh sport seems to date from the 1960s, when wider Welsh nationalism took on the more overt, confident and even confrontational character. Today, the healthy state and prominent television coverage of Welsh club rugby (at least in comparison to Welsh soccer) mean that very few people in Wales support an English rugby club and thus there is little individual identification between Welsh fans and English players. Welsh rugby sees itself on a par with England. Even where there are not current successes to match such rhetoric, there are shared memories of victories from the past. Thus the English national XV takes on the persona of the arrogant neighbour who must, and can, be cut down to size. This persona is further developed by English rugby's middle-class and establishment associations which contrast unfavourably with the more populist image of rugby in Wales. (Jones 62)

このようにマーティン・ジョーンズは、1960年代以降、ウェールズのラグビーがイングランドへの対抗意識を投影する場として発展し、人気を博してきたこと、そしてイングランドのラグビーがしばしば保守的なミドル・クラスのイメージと結びつくのに対して、ウェールズのラグビーがより大衆的なイメージを持っていることを指摘している。

ちなみに、ラグビーのウェールズ代表チームの愛称は“The Red Dragons”である。これはウェールズの旗にも描かれている「赤い竜」に由来している。この赤い竜は、サクソン人と戦うブリトン人の象徴として古来用いられ、ユースター・ペンドラゴンにも「燃える火の竜」のように尾を引く星に導かれてサクソン人に勝利したという伝承がある（Knowles 7）。ハウルがペンドラゴンを名乗るのは、ウェールズのラグビーに対する彼の愛着を示すものでもあるのだ

ろう。

一方、クリケットはウェールズにおいて、ラグビーとは大きく異なるイメージをもつ。このことに関して、リチャード・キャッシュマンは次のように論じている。

British cricket by the late Victorian era was a more middle-class game than soccer and, as Keith Sandiford has noted, 'failed to compete with soccer as a money-making enterprise'. Sandiford identifies the fundamental cause of English cricket's 'relative decline as a sport spectacle' in the 'deliberate refusal of its administrators to modernize it'. The game remained a 'leisurely and protected affair geared to meet the needs of pre-industrial gentleman-farmers'.⁹ (Cashman 37)

このようにキャッシュマンは、クリケットがサッカーと比べてより中産階級的なスポーツであり、とくに伝統的な地主階級の嗜好に合った娯楽として存続してきたことを指摘している。さらに彼は、そのためイギリスのクリケットは、ウェールズやスコットランドなど、国の周縁部に行くほど支持されなくなると論じている。

British cricket gained popular support in some parts of the country, such as Yorkshire but was (and is) stronger in some parts of the British Isles than others. Cricket in Britain is relatively weak towards the periphery, such as Wales, Scotland or Cornwall for instance. While Wales developed a national rugby team, there is no Welsh cricket team as such, the Glamorgan country side (which is just one of some seventeen country sides in the 'English' competition) is the closest to a Welsh representative side. (Cashman 37)

ラグビーのウェールズ代表チームがイングランドに対して対抗意識を燃やすウェールズ人たちの心のよりどころとなってきたのに対し、キャッシュマンが述べているように、クリケットではウェールズ代表チームはそもそも存在しない。クリケットはむしろ、彼らが対抗すべきイングランドの価値観を体現するものとみなされるのである。

それでは、ガレスはいったい何者なのだろうか。ガレスといえば円卓の騎士サー・ガレスに由来する、ウェールズ的イメージの強い名前である。いかにもウェールズ人らしい名を持ちながら、息子にクリケットを教え込もうと躍起になっているガレスは、ウェールズ人でありながらイングランド中産階級的な価値観を内面化し、その生活スタイルを模倣することで、階級上

昇をはかっている人物であると考えられる。それはおそらく、ラグビーを通してウェールズ人としてのアイデンティティを確認しようとするハウルとは対極にある生き方である。

そのことは、ガレスの住まいのあり方によってさらに補強される。ウェールズを訪れた際、ソフィーは次のような印象を抱く。

Nobody seemed to be about among the houses. That may have been due to the drizzle, but Sophie had a feeling that it was really because, in spite there being so many houses, this was somewhere at the edge of a town. (145-6)

ここでソフィーが感じ取っているように、ガレスの家があるのは郊外の新興住宅地である。それは通りに建ち並ぶどれも同じような家の一軒で、扉には波ガラスがはめ込まれ、玄関ホールは整頓され、磨きたてられている。ドアには“Rivendell”と書かれた札が下がっているが、これはトルキンの『指輪物語』に登場する「裂け谷」のことだ。新井潤美は、19世紀において経済的な余裕を獲得したロウアー・ミドル・クラス層が、郊外 (suburbia) に住居を構えることによって伝統的な中産階級の生活を模倣しようとしたこと、そしてそれがしばしば揶揄や嘲笑の対象となったことを指摘している。

そして十九世紀後半になって、ミドル・クラスの新参者たち、同じロウアー・ミドル・クラスの中でも事務員たちまでもがミドル・クラスのステイタスの確認のために郊外に移り住むようになると、いよいよ郊外は嘲笑の対象となるのである。鉄道の線に沿って、無秩序に延び続ける郊外の住宅地は美観を損なうとして攻撃を受けた。サバーバンという言葉は冒頭に述べたように、「視野の狭い、偏狭な考え方をする」という軽蔑的な意味で使われるようになった。クラップム、ホロウェイ、ケンザル・グリーン、ハイゲートといった「典型的」な郊外住宅地の名前は嘲笑をもって迎えられた。サバーバンとは趣味の悪さ、せせこましさ、階級に対するこだわり、虚栄といったあらゆるミドル・クラスの悪徳をあらわす言葉となったのである。〔中略〕そしてこれが、現在にいたるまで、英国の郊外という場所にまわりつくイメージなのである。(新井 78-9)

また新井は、これら郊外に暮らすロウアー・ミドル・クラスが、自分の住む通りの名や家の名にもこだわったことに言及している。

建物の外見だけではない。通りの名前、家の名前なども、重要な要素だった。宅地開発業者たちはここでもロウアー・ミドル・クラスの上昇志向に応えるべく趣向をこらした。家はヴィラと呼ばれ、たとえテラスハウスであっても前と後ろに小さな庭がついていた。そしてこれらのヴィラの並ぶ通りには、有名な貴族の名前、あるいは詩人や文学者の名前がつけられた。(新井 77)

おそらくガレスは、自分たちの「教養」と「センス」を世間にアピールするために、自分の家に『指輪物語』からとった名前をつけたのだろう。ガレスはこのように、ほとんど痛々しいほどに、郊外に住む上昇志向の強いロウアー・ミドル・クラスとして表象されている。

では、このガレスとハウルの間に存在する軋轢とはいったい何なのだろうか。それを考察するためには、私が前の論文で分析した、魔女がジョン・ダンの詩を通してハウルにかけた呪いについてももう一度検討しなければならない。この呪いは、詩に書かれていることがすべて実現したとき魔女はハウルを捕らえることができるというものなのだが、ハウルは第14章で、呪いの項目のいくつかは彼の過去の行為としてすでに実現してしまっている、と明かしている(198-9)。翌日、風邪でまだ朦朧としているハウルは半分眠りながら、まるでその話の続きであるかのように、ソフィーに次のように語る。

He may even have thought it was the day before, because he said, “‘Teach me to keep off envy’s stinging’—that’s all part of past years now. I love Wales, but it doesn’t love me. Megan’s full of envy because she’s respectable and I’m not.” (208) (下線は引用者による)

ここに決定的な情報が示されている。呪いの項目のひとつである「嫉妬の棘から身を守る」ことを、ハウルが過去において行っているということ、そしてさらに重要なのは、下線部にあるように、その嫉妬の棘を彼に向けたのが姉のミーガンだったということである。

下線部に使われている「リスペクタブル (respectable)」という語は、世間に受け入れられるような穏当な振舞いや生活習慣を表す形容詞で、とくに中産階級イメージとの結びつきを強くもっている。リスペクタブルなミーガンがそうでないハウルを羨むというのは、筋が通らないように見えるかもしれない。しかしそれは、ミーガンとハウルがともに、ラグビーを愛し、ウェールズ人としてのアイデンティティを誇りに思うような一族の出身であるとすれば説明がつく。このことはつまり、ミーガンが現在送っているような、ガレスの妻として郊外の新興住宅地でひたすら中産階級のリスペクタビリティを追求する生活が、彼女の意にそわないもので

あることを示唆している。

ひょっとしてこれが、ミーガンがハウルのために払った「犠牲」なのだろうか。前にも述べたように、この件はハウルが大学へ行ったことと関係があるようだ。ミーガンに初めて会ったとき、ソフィーは彼女の容貌を“*She was older than Howl, but quite like him, with the same long, angular face, . . .*” (147) と形容しているが、ハウルと顔立ちが似ているミーガンは当然かなりの美人である。もしかしたら、彼女はガレスから、自分と結婚するなら義理の弟になるハウルの学費はめんどうを見てやる、ともちかけられ、それを断りきれなかったのではないだろうか。

私は、このことが、ハウルが魔法世界にやって来たそもそもの原因だったのだと思っている。自分に向けられるミーガンの嫉妬、あるいは羨望の「棘」から身を守るために、そして自分のせいで姉に意にそわぬ結婚をさせてしまったという負い目から目をそむけるために、ハウルにできたことは別世界に逃げ込むことだけだった。そしてその心の痛みから逃れるために、彼は心臓をカルシファーに与えてしまい、女性たちを相手にゲームのような恋愛ごっこを繰り返していたのだろう。

このように、ハウルが姉のミーガン、さらにはその夫ガレスとの間に抱えている軋轢は、けっこう深刻なものである。これはソフィーの場合のような、義理の母とのちょっとした気持ちのすれ違い、というとはわけが違う。ハウルはこの物語の中でその問題を克服するにいたるのだろうか。そのことは作品中に明示されてはいない。しかし、ハウルがソフィーと出会い、お互いを理解していく過程が、彼が少なくとも心の中で、ミーガンやガレスの問題と折り合いをつけていく過程に重なっているのではないかと考えられる。

第14章の終りに、ハウルとソフィーがともにミーガンに言及する場面がある。

“Sometimes,” he said reproachfully, “you sound just like a Megan.”

“Sometimes,” Sophie answered, shooing the dog out of the room in front of her, “I understand how Megan got the way she is.” (201)

話の流れからするとこれは単に捨て台詞の応酬なのだが、それでもハウルがソフィーとミーガンを重ね合わせて見ていること、そしてミーガンがなぜ現在のような態度をとるようになったかは、ソフィーにも理解できるのだということが示されている。ミーガンと立場こそ違え、ソフィーも家族のために自分の気持ちを抑えて生きてきた女性である。家を出てハウルの城に来たばかりのころ、彼女は次のように感じている。

It was odd. As a girl, Sophie would have shrivelled with embarrassment at the way she was behaving. As an old woman, she did not mind what she did or said. She found that a great relief. (66)

自分の家でソフィーが感じていた葛藤は、帽子店の経営者の娘として生まれ、きちんとした教育を受けた、いわば中産階級の女性として、リスペクタブルに振舞わねばならないという重圧からくるものでもあった。老女の姿をとり、掃除婦に「身を落とす」ことでソフィーはその重圧から解放される。

ソフィーよりもさらにミーガンに似ているのがファニーである。ハッター氏の妻が亡くなったあと、店の売り子だったファニーは彼の後妻となる。これは様々な「事情」がからむ結婚であったはずで、ファニーが本当にハッター氏と結婚したかどうかは誰にも分からない。それにもかかわらず彼女はその後、店の切り盛りと娘たちの養育に全力をつくし、娘たちが成長してハッター氏が亡くなってから、ようやく自分の意思で結婚相手を選ぶことができるようになる。こうしてみると、ソフィーとファニーはどちらもある意味でミーガンの分身だ。彼女らが理解し合い、和解するに至るプロセスに手を貸すことは、ハウルにとってミーガンに対する「償い」なのかもしれない。ウェールズの家族が魔女に襲われ、ハウルが救いに駆けつける場面が、ソフィーが家族と再会する場面の直後に置かれているのは、このことを象徴しているのだろう。ソフィーとの関わりを通して、ハウルはようやく、自分からミーガンに働きかけることができるようになるのである。

そして、ガレスの問題に重要な関係をもつと思われる登場人物が、ソフィーの妹、レティーの求愛者として現れるパーシヴァルである。この名は円卓の騎士サー・パーシヴァルに由来するウェールズ的な名前前で、その点でもガレスとの結びつきを感じさせる。

パーシヴァルは、荒地の魔女がソフィーの帽子店を訪れたとき、ギャストンという従僕として同行している。その後彼は魔女の呪いで犬に姿を変えられ、魔法使いフェアファックス夫人に弟子入りしていたレティーのもとに赴く。そしてソフィーのことを心配したレティーの願いで、彼は犬の姿のまま、ハウルの城にいるソフィーのところへ来る。

パーシヴァルの重要性は、彼が魔女にとっての情報源だという点にある。第12章で魔女がソフィーに会ったとき、彼女はハウルの故郷であるウェールズについての情報を手に入れたと得意げに話しているが(182)、その情報はパーシヴァルからもたらされたものようだ。第19章で彼はそのことについて次のようにソフィーに語っている。

“She wanted to find out about Howl,” Percival said.

“Howl?” said Sophie. “But you didn’t know him, did you?”

“No, but I must have known something. It had to do with the curse she’s put on him,” Percival explained, “but I’ve no idea what it was. (256)

ここで述べられているように、魔女は呪いに用いた詩の内容をハウルのこれまでの行動と一致させる必要があり、そのためにハウルの情報を集めていたのである。後にパーシヴァルは、王の弟ジャスティン王子と魔法使いサリマンの一部を魔女が混ぜ合わせて作った人物であることが判明する。パーシヴァルの中にサリマンの人格や記憶が含まれているなら、彼がウェールズについて知っているのは不思議ではない。

ところが、ここで奇妙なことに気づく。魔女がウェールズの情報で最も必要としているのは、詩の「嫉妬の棘から身を守る」というくだりに相当する、ハウルとミーガン、そしてガレスの関係にまつわることであるはずだ。サリマンがウェールズ出身であるにしても、ハウルがこれまで誰にも話したことがないであろうこの事情をなぜ知っているのだろうか。ここもやはり、サリマンもしくはサリヴァンが、ハウルと面識のない別のウェールズ人であると解釈すると、説明しきれなくなる部分である。

われわれはここで再び、「サリマンとは何者か」という疑問に立ち返らねばならない。私は前述の論文で、サリマンは実在のウェールズ人ではなく、ハウルがゲームで創作したキャラクターであり、彼がそれを、自分の引立て役とするために、実在の人物であるかのように装って魔法世界に送りこんだのだと論じた（菱田 6-7）。そうとすれば、ハウルはこのキャラクターをいつ作ったのだろうか。第 11 章でのハウルとミーガンのやりとりから察するに、ハウルはガレスの家に何年か同居していたようだ。たぶん彼はそこから大学に通っていたのだろう。彼が、おそらくはゲームの制作がきっかけで魔法世界の入口を発見し、そちらで暮らすようになったのは、卒業前後のことではないかと思われる。

もしハウルがこの時期に、自分の引立て役となるべきキャラクター、つまり大柄で、無骨で、努力家で、自信たっぷりだが想像力やセンスにやや欠ける人物を創造するとしたら、誰をモデルにするだろうか。ガレス以外あり得ない。ハウルがガレスをモデルとしてサリマンを作り上げた際、ガレスの人格や記憶の一部を取り込んでしまったのだとすれば、サリマンの心の中に「嫉妬の棘」に関する情報が存在し、それがパーシヴァルに引き継がれたというのはいり得ることだ。ガレスとパーシヴァルがともに円卓の騎士の名をもつのは、このつながりを示唆するためなのではないだろうか。

魔女との戦いの終盤で、ハウルは自分のこのような行いを目の前に突きつけられることになる。第21章でソフィーが荒地の魔女の砦に入り込んだとき、サリマンとジャスティン王子を混ぜ合わせて作った「人形」を前にして、魔女は次のように述べている。

This body is a perfect mixture of Prince Justin and Wizard Suliman. It is waiting for Howl's head, to make it out perfect human. When we have Howl's head, we shall have the new King of Ingary, and I shall rule as Queen. (286)

ハウルがこれまでやってきたことは、魔女のこの所業と大差ない。彼は他人の一面だけをとらえ、それを適当にこね回して自分に都合のよいキャラクターを作って利用してきたのだから。それは、ハウルがガレスについて一面的な見かたしかしてこなかったということを象徴的に示している。彼はガレスを「姉を奪った俗物」として見るのみで、自分を同居させ、大学に通わせ、さらに家を出た後も車や本を何年も保管し続けたガレスの寛大さを思うこともなく、リスベクタブルな家庭を営むよき夫、よき父親であろうとするガレスの努力に目を向けることもなかった。こうして、まず詩の呪いによって、そして人を「部品」にして人形を作ろうとする行為によって、荒地の魔女はハウル自身の姿として、すなわち、彼が直面し、克服しなければならない「過去」として、ハウルの目の前に大きく立ちはだかる。

ハウルは魔女に勝利するが、それは少なからずソフィーのおかげだ。彼がなりふり構わずソフィーを追って魔女の砦に飛び込み、それまでずっと目をそむけてきた自分の過去に面と向かったとき、勝敗は事実上決しているのである。ハウルがソフィーとの出会いを通して人を全体として見ることの大切さを学んでいなければ、そして、身の危険はおろか自分の感情さえおかまいなしに、アンゴリアン先生を救おうと魔女の砦に駆けつけたソフィーの無鉄砲な行動がなければ、おそらくハウルは敗れていただろう。ソフィーが自分の葛藤を克服するのにハウルの助けを必要としていたように、ハウルも自分の問題と向き合うためにソフィーが必要だった。このように、ソフィーに力を貸し、パースヴァルを助け、サリマンとジャスティン王子に本来の姿をとり戻させようとするハウルの闘いは、ガレスに対して抱いてきた敵意を克服し、ひとりの人間としてのガレスの本当の姿を見つめようと彼が苦闘する過程として解釈できる。

まとめ

ここまで見てきたように、『ハウルの動く城』において、ハウルがウェールズ出身であるという設定は、彼が抱える問題を表象するためにじつに効果的に使われている。それは、階級や地域が生み出す文化やライフスタイルの違いが個人の間の軋轢へと結晶していく過程をものみごとに浮かび上がらせ、それに向き合わねばならない人々の苦悩を説得力をもって描き出している。

しかし、ジョーンズが他の作品ではとくにウェールズを舞台としたり題材としたりしていないことを考えると、それでも「なぜウェールズなのか」という疑問は残る。他のモチーフもあり得たのではないだろうか。ジョーンズは戦争中にウェールズに疎開し、ウェールズ語を習ったこともあるそうだが、語られることのないウェールズへのこだわりが心の中にあっただのかもしれない。それについては今後の課題としたい。

(※ 2012 年度日本イギリス児童文学会東日本支部春の例会における口頭発表の内容に加筆修正した。)

引用文献

- Cashman, Richard. "Austraria." *The Imperial Game: Cricket, Culture and Society*. Ed. Brian Stoddart and Keith A. P. Sandiford. Manchester: Manchester UP, 1998. 34-54.
- Jones, Diana Wynne. *Howl's Moving Castle*. 1986. London: Collins, 2000.
- Jones, Martin. "“Every day when I wake up I thank the Lord I'm Welsh”¹: Sport and national identity in post-war Wales." *Sport and National Identity in the Post-War World*. Ed. Adrian Smith and Dilwyn Porter. London: Routledge, 2004. 52-68.
- Knowles, Sir James. *The Legends of King Arthur and His Knights*. 1862. London: Frederick Warne, 1923.
- Pervez, M. A. *A Dictionary of Cricket*. Hyderabad: Sangam Books (India), 2001.
- Williams, Peter N. *Presenting Wales from A to Y—The People, the Places, the Traditions: An Alphabetical Guide to a Nation's Heritage*. St. Victoria: Trafford, 2003.
- 新井潤美, 『階級にとりつかれた人びと：英国ミドル・クラスの生活と意見』, 中央公論新社, 2001.
- 菱田信彦, 「ダイアナ・W・ジョーンズ『ハウルの動く城』にみる他者としての家族」, 『川村英文学』, 第17号 (2012), 1-14 頁.